

明治天皇を育てた 田中 河内介

(たなか かわちのすけ)



田中河内介 (1815 ~ 1862)

小豆島の北東部、福田港から歩いて7分の高台に、雲海寺という小豆島八十八ヶ所霊場の寺があります。長い石段を上がって右奥へ行くと、江戸時代の終わり頃、福田の浜に流れ着いた田中河内介と左馬介親子の墓があります。田中河内介は、1815年（文化12）、但馬国の神美村香住（今の兵庫県豊岡市）に生まれ、小さい頃から秀才として知られ、明治天皇が幼いときの教育係として大変慕われたと言われている人です。



雲海寺 (小豆島町福田)



田中河内介・左馬介の墓 (雲海寺)

江戸末期、孝明天皇の6人の子どもたちのうち、無事育ったのは明治天皇ただ一人でした。この頃は、天皇家の男の子たちの教育は女の人に任せられていましたが、それでは強い男子に育たないという理由で、男の人が育てることになり、河内介はのちに天皇となる祐宮の教育係に命じられました。祐宮は病弱で何度となく重い病にかかりましたが、河内介は、「必ず、元気でかしこい子に育ててみせます。」と誓い、小さかった祐宮を毎日背中におぶって、あやしながら熱心に育てました。言葉が分かり、しゃべれるようになると、子守唄代わりに「人として生きていくために大切なことは何か」など、「孝経」という中国の難しい本に書かれていることを教え、祐宮が5歳になるまで世話をしました。



明治天皇

祐宮は明治天皇となった後も、河内介のことを「河内介じい」と呼んで、懐かしく思い出していますが、厳しい中にも優しく育ててくれた恩人ともいえる河内介を慕い、ずっと忘れませんでした。そして、まわりにいた多くの人たちも、明治天皇が河内介を慕っておられたという話をしています。

かわちのすけ
河内介も天皇のことを思い、次のような歌を残しています。

「大君の御旗のもとに死してこそ ひとと生まれしかひはありけれ」

この歌からは、明治天皇のことを愛しうやまった河内介の思いがよく伝わってきます。

1853年（嘉永6）にペリーが来航して開国を迫り、1867年（慶応3）に王政復古の大号令が出て徳川幕府が倒れるまでの15年間は、江戸時代終わりの世の中が大きく変わった時代でした。このとき、河内介は度重なる幕府の政治の失敗に大きな不満をもっていました。

河内介は、このまま幕府が続くのを何とか止めようと、幕府を倒し（倒幕）、天皇の政治に戻すことが大事だと言いはじめました。これは、将来天皇となる若い祐宮のために、新しい理想の日本を用意しなければと決心したからでもあります。それまで、お互いに対立していた全国の藩の武士たちが「倒幕」という大きな目標の前に団結できたのは河内介の呼びかけによるものだと言えます。

倒幕の動きが広がる中、河内介は九州でも一番力のある薩摩藩（今の鹿児島県）とも協力しようと何度も九州へ行き、いっしょに行動してくれるなかまを増やしていきました。しかし薩摩藩は、まずは天皇（公）と幕府（武）とが協力して（公武合体）、政治が混乱しているのをおさめ、そして外国も追い払おうという考えでした。

そんな中、1862年（文久2）3月16日、薩摩藩の島津久光は兵士千人とともに鹿児島を出発し京都に向かいました。京都にいる河内介を中心とした倒幕派たちは、久光が着けば幕府を倒すためにいっしょに立ち上がろうと待っていました。しかし、久光は倒幕ではなく、まずは公武合体を実現するつもりだったので、倒幕派の動きを止めようとした。4月23日、久光は京都の寺田屋に集まっていた倒幕派を取り押さえるよう命令したので、薩摩藩士どうしの激しい斬り合いになりました。河内介は騒ぎが大きくならないように、何とかみんなを説得したので、ようやく騒動は治まりましたが、死者9人がでました。この事件は、薩摩藩士同士が争った「寺田屋騒動」と言われています。

寺田屋にいた薩摩藩士たちは薩摩に帰され、他の国の武士たちは自分の藩に引き取られました。ところが、河内介親子とほかの3人は行き場所がなかったため、薩摩藩に預けられることになりました。しかし、薩摩藩は最初から鹿児島（薩摩）まで連れて行くつもりはありませんでした。

薩摩藩は、捕らえた5人を2隻の船に分けて乗せ、大阪から鹿児島に向けて出発しましたが、途中の播磨灘で河内介親子を殺害し、海上に捨てました。

親子の遺体は翌日小豆島の福田湾内に流れ着きました。1862年（文久2）5月1日、福田の前浜海岸に打ち上げられた二人の遺体は、手を後ろに



福田の海岸

して縛られ、足かせがかけられ刺し殺されていました。このとき、河内介は48歳、息子の左馬介はわずか18歳でした。そして、別の1隻に乗せられた他の3人、千葉郁太郎、中村主計、海賀宮門は、5月4日、日向細島（宮崎県日向市）で縄を付けられたまま、斬り殺されました。もちろん、このことは秘密にされ、誰にも知らされませんでした。

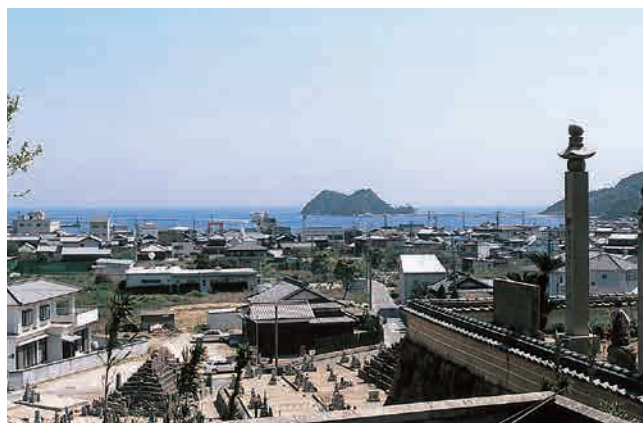


日向細島（宮崎県）

二人の親子の遺体は、福田港に近い遠干浜墓地に手厚く埋葬され、その後福田村の人たちは「足かせ大明神」として村をあげて供養し墓を守り続けました。



遠干浜（小豆島町福田）



田中河内介親子の墓からの眺め

寺田屋騒動から6年後、幕府は倒れ1868年（明治元）に天皇の政治が復活し明治の世が始まります。河内介の願った明治天皇の新しい政治はやっと実現しますが、河内介親子の行方は依然として不明のままでした。

その後、1892年（明治25）、河内介の孫にあたる北村嘉猷が小豆島に来て、小豆郡長の森遷と福田村の三木貫朔（流れ着いた親子を発見したときに遺体を調べた医師）に話を聞き、福田に流れ着いたのは、河内介親子であることがやっと分かりました。亡くなって30年目によく遺族による墓参りが実現したわけです。遺族の方は最初、これから先の墓参りは小豆島では遠すぎるので、住んでいた京都に移すつもりでいました。しかし、河内介親子の墓を30年もの長い間大事に守ってくれた福田村の人たちに感謝する気持ちが強くなり、そのままにしておくことになりました。この墓は、1961年（昭和36）の百回忌のときに雲海寺の今の場所に移されました。

日向細島で亡くなった3人も、河内介親子と同じように地元の人たちが手厚く供養して墓を守っており、小豆島では河内介親子の墓の横に3人を慰霊する碑が置かれています。



細島三志士の慰霊碑

福田村の人たちは、1899年（明治32）に海を見下ろす丘に「田中河内介父子哀悼之碑」を建てました。この時、明治政府より100円（現在の200万円相当）をいただきました。この哀悼碑は1997年（平成9）に遠干浜へ移された後、今は雲海寺に置かれており、哀悼碑の横を通って墓参りができるようになっています。

田中河内介親子を偲ぶ取り組みは今も変わりなく続けられており、雲海寺では法要が毎年5月1日に行われ、田中家の子孫の方や出身地の兵庫県豊岡の人たち、そして小豆島の人たちがたくさん集まって供養しています。



田中河内介父子哀悼之碑（雲海寺）



田中河内介親子の法要に集まった人たち（雲海寺）



田中河内介の生涯

年代	年齢	その時代にあった主な出来事
1815（文化12）		但馬国神美村に生まれる。 1792 ロシア使節ラクスマン根室に来航 1825 異国船打払令
1835（天保6）	21	京都に出て山本亡羊の塾に学ぶ。 1837 大塩平八郎の乱 1841 水野忠邦の天保の改革
1843（天保14）	29	権大納言中山忠能に仕える。中山家臣田中近江介長女と結婚し田中家を継ぐ。
1852（嘉永5）	38	皇子祐宮（後の明治天皇）誕生。養育係（5年間）となる。 この頃中山家に勤王の志士多く出入りし、河内介とも交わり倒幕の考えが芽生える。 1853 ペリーが浦賀に来航 1854 日米和親条約
1857（安政4）	43	『安国論』を出版したが、幕府に知られ絶版となる。 中山家を辞し浪人となり、倒幕運動に奔走する。
1862（文久2）	48	1858 日米修好通商条約 1860 桜田門外の変
2月		九州各地を訪ね、倒幕の相談をする。
4月22日		勤王の志士たち伏見寺田屋に集まり、河内介を中心に京都所司代襲撃の計画を練る。
4月23日		寺田屋騒動。志士たち薩摩屋敷へ連行される。
4月30日		河内介父子薩摩へ送られる途中船中で殺され、播磨灘へ投げ込まれる。
5月1日		福田海岸に河内介父子の死体漂着（30年間身元不明のまま） 以後、河内介父子の慰霊祭が福田雲海寺で毎年行われている。 1862 坂下門外の変 皇女和宮将軍家茂と結婚 生麦事件 1863 薩英戦争 1864 四国艦隊下関砲撃 1866 薩長同盟 1867 大政奉還 王政復古の称号令